



ジョイフル三ノ輪商店街の歴史②

小林マツさん（明治44年生 平成21年6月掲載 当時97歳 享年99歳）のジョイフル三ノ輪商店街の記憶を再編集しました。

「住所は北豊島郡三ノ輪上町286番7号でした。」

新潟県から家族8人で上京し三ノ輪に家を借りました。年齢は定かではありませんが、学校に上がる前です。家賃は5円50銭です。三ノ輪と呼ばれる地名が下谷区三ノ輪町（台東区）もありました。この商店街は三ノ輪上町286番で1から10まで号を分けたのではないかと思えます。現在、ジョイフル三ノ輪商店街は1班2班と班ごとに分かれて行事を行っていますが、その名残だと思えます。

「馬の子が連れて行かれたみたいだ」子供がぞろぞろと引越して来たことを屠殺場に向かう家畜が家の前の道を往來していたのになぞらえて、近所の人々が笑って言っていたのを覚えています。

父は、皮屋に勤めに行き、母は、お惣菜屋さんからはじめ、次第にどじょうを扱った「小林どじょう」と呼ばれてました。どじょうは、棒秤の先にざるをつけて秤売りしてました。

三ノ輪の商店街の通りの裏のあちこち井戸がありました。どじょうの管理には水が大量にいるため、手押しポンプで汲み上げた水一斗（約18リットル）を天秤棒の両端につけたバケツに入れて路地をかに歩きして運んでました。

大正15年に水道が引かれ、楽になりました。近くで火事があったときに、この水道を使って消火したので、ブリキより高級な赤の洗面器をいただきました。

トイレは汲み取り式でかめに排泄物を溜め、柄杓でいっぱいいくらと値段を取っていました。汲み取り券を売っている店もあつたと思えます。水はあまり浸からなかったのですが、便器にふたをして重しを乗せて上から水が入らないようにしてました。水洗にしたのは、昭和25年です。

瑞光公園の通りを挟んで三ノ輪座がありました。相州屋さんの向かいの靴屋さんから化粧品屋の名久井さんのまで幅があり、公園を分断する通りまでの大きい

映画館でした。田中絹代や栗島すみ子、日本映画界最初のスターである尾上松助のチャンバラ映画を見ました。無声映画だったのでスクリーンの脇に活動弁士（活弁）上映中の映画の進行に合わせて、その内容を解説してました。夜遅くまでやっていたので、各商店は朝起きると同時に店を開け、映画館がはねる（終了）10時位まで店を開けていたと思います。

「震災も空襲も縁がなかったのは、三ノ輪と神田佐久間町でした」
関東大震災があつた時、小林マツさんは12歳でした。二階建ばかりの商店街の屋根が傾いてくつついた事を覚えています。始業式が終わり家におり、売るために用意したふかしたさつま芋を通行人に配りました。商店街では震災による火事も潰れた家もなかったそうです。
「鍋をかぶって」

戦争時は空襲警報が鳴り、妹と二人で頭に鍋を被って瑞光公園まで行きました。が、どこに居ても同じと家に戻りました。

小林マツさんは瑞光尋常高等小学校（現在の瑞光小）の最初の卒業生で大正13年の卒業写真に羽織袴で写っております。

